

講演師は平和ボケ？ 子ども達に希望のある未来をみせる

講演師 三代目 神田 山陽

戦争責任のあつた芸能

会場に沢山の方がいるのでちよつとびつくりしています。もつと世の中無関心だと思つていて、無関心じゃなきゃ、あんな法案が通るわけないと思つていたんです。

不勉強でございますし、何の専門でもございません。今回のことと呼ばれて面食らつたのは私のほうでして、しかも市民フォーラムという場で、お心にかなうかどうか自信がありませんが、まずは全員が一致してこの場にいるとどうも思いたい。そういう話からはじめていきたい。

司会の方に紹介していただきましたが、紹介していただける立派なことではないと、自分自身をそう思っています。講演という仕事を二五年近くやってきました。講演という仕事をこ存じでしょうか。仕事はコウダンですと言うと、大変で

すね、道路ですか、住宅ですか、と言われる。どちらでもありません、という講演社の方ですかと聞かれ、面倒臭いから「そうです」と言つてしまいました。

落語家は全国で七百五十人います。落語の歴史が始まつたのは元禄のあたりと言われていますが、落語史上最大の人数です。講演は江戸の頃には随分勢いがあり明治初年には百八十数人、落語はその頃七十数人だったから講演の方がずっと多かったのが、今日では講演師は七十数名です。六十八とか七十一とはつきりした数字を言えないのかと思われるでしょうが、我々の世界は大変な高齢化がすすんでいて、いまこの瞬間に、どの先輩がどうなっているかわかりません。七十人前後とさせていたいただきたい。

イリオモテヤマネコが百頭生息しているそうですが、我々は絶滅危惧種より少ないわけです。無くつてもいいような芸能なんです。それには理由

開会にあたって

弁護士
上田 絵理



司会進行を担当します上田です。よろしくお願ひします。今日は安保法制についていろいろなお話しを皆さんからお聞きします。この法案に対して国民の多くが反対の意を唱えているなか、七月一六日に衆議院で強行採決がなされました。権力の暴走に歯止めをかけるために憲法があり、それが立憲主義なのにもかかわらず、このような事態になつていることに私も危機感を感じています。多くの弁護士、全国各地の弁護士会が、この動きを止めなければならぬと活動をしています。これを止めるのは国民が議論し、反対の声をあげていくことだと思います。本日の市民フォーラムが法制阻止に少しでも役立つことを願っています。

本日のメインゲストの神田山陽さんは、女

がございました、大東亜戦争のころ士気高揚に加担し、芸能としての戦犯を償わなかったために、信用のない芸能になったんですね。落語は勇ましい話がありありませんし、ましてや、けしからん、くだらないことをいうなど。慰問には行きましたが、街のなかでの高座は無く、戦争中落語は取り締まられたこともあったそうです。

その頃講談は随分お金をもらったそうです。六代目一龍齋貞山という方が一回お座敷に出ると、落語家の出演料が一回一万円だとすると、五、六人の軍人に聞かせるだけで五十万円くらいももらっていたそうです。六代目貞山から二代目山陽、私のところに伝わっているのは、忠臣蔵討ち入り後の引き上げる場面です。「……（軽妙に講談を披露）……」。大枚をもらい、戦争が終わったときに、しらばつくれたツケがきて、講談の人氣がなくなつたでしょう。

江戸川柳に「冬に義士 夏はお化けで飯を食い」というのがあり、冬になると赤穂義士伝が我々の米びつだったんです。夏は怪談話。これがマツカーサーが来たとき禁止になり、敵討ちものを主とする講釈というものはけしからん。敗戦国にいつかやり返そうという心情を根づかせていけないということで、講釈禁令というのが出たのです。そのときに我々の先輩は、このままじゃおまんまの食い上げだと、明治以来講釈といていたものを講談といういい方に改め、敵討ちの話はしませんと、パイプくわえた人（マツカーサー元帥）に謝つた

そうです。先輩方がそう言っていました。

赤穂浪士の話は我々のところでは誇りのようなものです。三百数十年、手を変え品を変え、大河ドラマもそうですし、歌舞伎でもそうですし、お芝居でも、映画でも、あらゆるところで出てくるのではないそうですよ。いつかは恨みを晴らす。喧嘩両成敗であつたはずが不公平な裁き、ましてや時の五代將軍綱吉は庶民から嫌われていた。ただ、いまと違って、直接幕府のことを云々言い出すと、よくて島流しか、斬首になる。ですから、あくまでも作り話だと大義名分をつくつて物語を始めたのが我々の先祖だったんです。だから軍部に頼まれて講談をやる。まして爆弾三勇士だとか、楠木正成を軍隊の前で話すような仕事ではなかつたんですけど、大衆の力をかりて商売をしていた者が、いつのまにか伝統芸能という言葉に乗つて恥づかしいような仕事になつてしまつたんです。人数七十人でも多すぎだと思えます。私が今すぐやめても誰も困る人がいない。うちの師匠も、「無くて、なくなつても、いい商売だ」と言っていました。

子ども達とかかわる

じゃいまの世の中に必要な商売は何だろうと考へはじめました。学校の先生ですかね。自分のことを少し話しますけれど、両親とも学校の先生で、

満別町、現在の大空町出身で、地元をはじめ北海道をこよなく愛しています。二三歳のときに立ち寄られた演芸場で二代目神田山陽の講談に衝撃を受け、弟子入りをされ、二〇〇二年に三代目神田山陽を襲名。二〇〇五年九月からは文化庁の文化交流使として一年間イタリヤに在任し、各地で講談を披露されました。現在は大空町を拠点に、全国で講談を披露されているほか、夏の子どもキャンプや冬のイグルー生活など、北海道の子ども達との交流を通して独自の活動を展開されています。それでは神田さん、お願いします。

子どもの頃から教員になりなさい、いい仕事だ、夢があるとやられていました。私が三歳のときにおふくろに言ったんだそうです。「学校の先生だけにはなりたくない」と。おふくろは山形に教職の採用がなくてやってきて、網走市山里というところで全校生徒十二人の担任を受け持ったと言っていました。二十四の瞳ですね、そんな美人ではありませんが、うちの母は。

わざわざ山形から教員になるためにきて、誇りを持ち、やりがいを感じていたのに、私が生まれたばかりに教員を辞めなければならぬ。だから私には期待したんです、学校の先生になりなさいと。でも私はなりたくない。三歳のときに私が言ったどうか分かりませんが、給料もらう仕事か格好悪いと言ったんだそうです。親父が給料袋を

おふくろに渡ししてお金を数えているのをみっともなく感じたんですね。

では、どんな商売がいいのか？いまに至っても分かりません。だからとなったのが講談だったんですが、これさえもいいとは思わない。じゃあ罪滅ぼしをすると許されるのでは、と仕事をしています。学校の先生にはなりませんでしたが、子ども達との時間を持とうと、NHKで十数年子ども番組に出ています。一緒に番組に出ているのは小錦さん。出身地はハワイですが、同級生は、ちょっと道を踏み外せば麻薬の売人に、女性は売春婦に。踏み外しやすいスラムに近い街なんだそうです。小錦さんはたまたまスポーツをやっていたからそうはならなかった。関取時代から卒業した小学校に寄付をし「将来に夢を持っているけど、生活に困っている子がいたら日本に寄こしてください」と、一年間に十人から二十人子どもを受け入れて、小錦基金をつくり二十年間つづけていて、



大したもんですね。

郷里の東藻琴小学校へ再入学

僕も何かしなきゃと思いあつちこつちの学校に出向いています。私が生まれ育った女満別町は、国の言うことをきいて東藻琴村と合併して大空町という格好の悪い名前になつちやつた。割を食つたのは東藻琴村で、借金の多い女満別と一緒に、人間の結婚だつたらとつくに離婚ですが、いまだに続いて今年で十周年です。そこで私は東藻琴小学校に再度入学してみたいです。いずれはこのまちで死のうと思つたので。仲の良かった同級生は帰つてみたらほとんどいなかったんです。農協と役場に一人いて、あとは町を出て働いて、正月くらいしか帰つてこない。

東藻琴小学校はここ十年くらい児童の数は減らず、百三十から百四十人、一学年一学級です。旧村には不文律があり、必ず四人以上子どもをつくる。バカみたいな話ですか、四人以上子どもがいる家庭が多い。

私が在校中いじめが二回ありました。どちらも転校生でした。外からやってくる人は嫌いなんです。僕も嫌われた一人なんです。大人が小学校に入学するつてんで、北海道の全テレビ局が取材に来たんです。新聞各紙も取材にきて、学校がちょっと恐れたんですね。

いじめ問題をクリアしないうちに、君が代不起

立で先生が飛ばされるのが道内ではじめて起きたんです。そのとき私に「学校に来ないでくれ」と言われ、私は仕事を休んで行つてののに、ですよ。このことを私に言われたくないからなんでしょうが、意味が分かりません。飛ばされた先生は話し合いの余地がなかったと言っていました。

実は講談は一方的に話す仕事ではなく、相手の呼吸を見ながら話を繰^よつていくのが名人芸だと思つています。この話はこう終わるといふ結論はありません。その場その場で、「名人に上手も下手もなかりけり、その土地、土地の水に合わねば」といふのが、我々の先輩が言い、案外、的を射た川柳ではないかと思つています。

その土地の水、いまならさしずめ空気という言い方をするでしょうか。自分の意思を、その空気を損ねない程度に合わせる。それは話し合いということですよ。相手の言つてることが、たとえ自分の意見と違つたとしても、どこかまで詰め寄つていくことができなければ、我々の仕事は意味のないものと考えています。

子ども達と関わりをもちましたが、でも二十年後まちは子どもが誰も残らないかもしれません。農家の子は継がないと言い、酪農に未来はないと言ひ、お父さんが郵便局にいるから郵便局に勤めたいけど、人が多くいるから津別町の郵便局にならないかもしれない。子どもなりに考えているんです。同級生が二十八人いましたが、東藻琴村に残つたのは一人もいませんでした。

なんで合併したんでしょう。地方創生はどこにいったんでしょう、地方創生なんて子ども達の内にもありません。それは大きなあきらめムードではないかと思っっているんです。

戦争の仕組みを学ぶ子ども

私が子どものころは、勉強をしいい学校に行ければ、いい就職ができて、いい家に住み、いいものが食えて、いい車ももて、死ぬまで安泰の年金があった。そうした漠然としてあったイメージは、東藻琴の子ども達に、そして私のせがれにもなくなっている。

この間まで都内にある筑波大学附属小学校で一年間、総合の時間で先生のような真似事をしました。選りすぐりの秀才、エリートといわれるような子ども達で、「いまは、お母さん、お父さんの子どもの頃とは違う」と気づいています。

親が医者の子がクラスに十数人いて、六人が医者になりたいと言い、そのうち二人が国境なき医師団で働きたいと言う、いいじゃないですか。なんでと聞いたら、お父さんとお母さんが儲けすぎているので罪滅ぼしだと言うんです。賢い子は言うことが違いますね、立派なもんですよ。

その子は、「国境なき医師団は戦地に行つて、死にそうな子ども達を助けている。そういう仕事かしたい」と。「じゃあ、戦争がなくなつたらどうするの」と聞くと、小学校五年生の子は「戦争

はなくならない」と知っっているんですよ。

「なぜなくならないのか」と聞くと、一部の地球上のお金持ちが戦争があることによつて末代まで潤うために、と言うんですよ。戦争がいつもどこかである理由を五年生の子が知っっているのは特別なことではなく、ネットで調べればたくさん出てきます。その子に、持続する社会づくりを訴えている田中優さんの本を読んでくださいと言われ、読んだことがなかったので三冊貸してくれ、戦争が起きる仕組みまで教えてくれた。戦争がなくならない理由はお金持ちが金儲けをするためだ、日本もそれに加担している。大手銀行にお金を預けると、回り回つて戦争をするための資金になることを、子どもが知っっている。

私はちよつと愕然としたんです。いつぱしに講演なんかやつていて、十数年前、国のお金でイタリアに行つたんですよ。本当に申し訳ありませんでした。一年間の滞在費を随分もらいました。そのころレギュラーの仕事が六本持つていたので、それをやめていくと一本くらの仕事にしかならなかつたんですが、ハツと思いました。この仕事でこんなにお金をもらう仕組みは何なんだ。有名なお笑いコンビは十億円ですよ。そんだけのお金を私たちは知らないうちに、どこから、かすめ取られている。

不都合なことを言わずに、なんとなくアハハと笑つているような世の中をつくつているのは、どこかの誰かが操作しているんです。そうとしか思

えない。そうでなかつたらこんなにお金の揚がりがあるわけがない。

以前CMに出たときに四百五十万円をもらいました。すごいでしょう。全国牛乳普及協会ということで、私のCMが最後に協会は他の団体と合併しました。「にほんごであそぼ」という子ども番組に出ていて、番組は子どもに人気があり、国際的な賞をもらいました。出演していたのは、私に他に小錦さんと、野村萬斎さんで、ギャラが足りるのは多分私だけだったんでしょう。お金をもらうときにちよつとドキツとしました。今後牛乳を飲んだらお腹が痛いなんて言えない、と契約書に書かされたんですよ。お腹が痛くなつたのは事実なのに言えなくなる、お金をもらうこととはそういうこととの引き替えで、恐ろしい世の中の仕組みだなと愚かな人間はこんなときに気がつく。

ただそつち側に乗かつていければ、お金はある、命は取られないと考えているのはどれだけいるでしょうか。そして芸人で成功とはせいぜいそんなもので、世の中に対してあだこうだと正直なことを言つた途端に、抹殺されていくような世の中がもうすでに始まつている。それに気がつかないで、子ども達にテレビをみせて、この人たちは大したものなんだ成功していい好きなことを言つてようだ。だけど、言えないことがたくさんあることを分らないよう、牛乳を水で薄め、もやみたいなもので包んでいる。作家の辺見庸は、この薄いもやみたいなものを、サラララップのような

膜をかけられたと言っていますが、直接触れないように、直接見えないようなものです。

戦争責任はだれ

このフォーラムの直前に四国の松山に行つてきましたが、松山に行つたら必ず寄ると思つていたところがあつて、それは伊丹十三記念館です。阪東妻三郎の映画「無法松の一生」の脚本を書いたのが、伊丹十三の父親の伊丹万作で、親子とも大変な映画人でした。伊丹十三記念館へ行き、伊丹万作の文章に触れ、俺は松山にこれを見に来たんだなどと思いました。

前の戦争直後、伊丹万作が映画界の戦争責任者を出す役割に選ばれたそうです。なぜなら、万作は戦争中に戦争を加担する映画を撮らなかつたからです。この戦争を映画で支えたのは誰ですか、あなたが選んで裁いてくださいと、魔女狩りのようなことになったそうです。その頃万作は「戦争責任者の問題」という原稿を書いていて、僕はそれをたまたま見つけたんです。なかなか立派な方だといふことは知っていました。誇り高い映画を撮り、弱者に目を向けて執筆していた人で、この時代には珍しいインテリだと思つていました。

この「戦争責任者の問題」をちよつと抜き読みをしますので、興味のある方はご自身で調べて下さい。

「考えれば考えるほどわからなくなる。そこで、

わからないというのはどうわからないのか、それを述べて意見のかわりにしたいと思う。さて多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。：おれがだまされたのだといつた人間はまだ一人もいない。：民間のものは軍や官にだまされた。：軍や官の中へはいればみな上のほうをさして、上からだまされたという。：上のほうへ行けば、さらにもつと上のほうから。最後にはたつた一人か二人の人間が残る勘定になるが、：わずか一人や二人の智慧で一億の人間がだまされるわけのものではない。：だましていた（のは）：『だまし』の専門家（ではなく）：日本人全体が夢中になつて互にだましたりだまされたりしていたのだからと思う。このことは、戦争中の末端行政の現われ方や、新聞報道の愚劣さや、ラジオのばかばかしさや、さては、町会、隣組、警防団、婦人会といつたような民間の組織がいかに熱心にかつ自発的にだます側に協力していたか。：ゲートルを巻かなければ門から一步も出られない。：たちまち国賊を見つけたような憎悪の眼を光らせたのは、だれでもない、親愛なる同胞諸君であつた。：自分の立場の保身（保身）につとめていたのである。：直ぐ蘇つてくるのは、直ぐ近所の小商人の顔であり、隣組長や町会長の顔であり、あるいは郊外の百姓の顔であり、あるいは区役所や郵便局や交通機関や配給機関などの小役人や雇員や労働者であり、あるいは学校の先生であり、：これは無計画な癡狂（癡狂）戦争の必然の結果。：諸君は、依然として自分だけは人をだまさない

かつたと信じているのではないか。：諸君は戦争中、ただの一度も自分の子にうそをつかなかつたか。：一度もまちがったことを我子に教えなかつたといきれる親がはたしているだろうか。：（子供）から見た世の大人たちは、一人のこらず戦争責任者に見えるにちがいない。：だまされたといふことは、不正者による被害を意味するが、しかしだまされたものは正しいとは、古来いかなる辞書にも決して書いてはないのである。だまされたときえいえば、一切の責任から解放され、無条件で正義派になれるように勘ちがい。：だまされるといふことはもちろん知識の不足からくるが、半分は信念すなわち意思の薄弱からくるのである。我々は昔から『不明を謝す』という一つの表現を持つている。：知能の不足を罪と認める思想にほかならぬ。：だますものだけでは戦争は起らない。だますものとだまされるものとがそろわなければ戦争は起らない。：あんなにも造作なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまつていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである。このことは、過去の日本が、外国の力なしには封建制度も鎖国制度も独力で打破することができなかった事実、個人の基本的な人権さえも自力でつかみ得なかつた事実とまつたその本質を等しくするものである。：専横と圧制を支配者にゆるした国民の奴隷根性とも密接につながるものである。：責任

を軍や警察や官僚にのみ負担させて、彼らの跳梁を許した自分たちの罪を真剣に反省しなかつたならば、日本の国民というものは永久に救われるときはないであろう。…戦犯者の追求ということもむろん重要ではあるが、それ以上に現在の日本に必要なことは、まず国民全体がだまされたということの意味を本当に理解し、だまされるような脆弱な自分というものを解剖し、分析し、徹底的に自己を改造する努力を始めることである。…」

まったく古びていません。昭和二十一年に書かれたもので、七十年経っていまもまったく同じじゃないですか。考えの浅い者がいまこの時間にテレビを見てへらへら笑っている。会場に来ている皆さんに言ってもしょうがないことですが、ここに来ないで「どうなってもしょうがない」と思っている人と根は同じなんです。

この間の選挙で、民主党はダメだから自民党にしておくか、と入れたばかりに今のようになっている。あなたの隣に住んでいる心優しい人に、このまま突き進んでいくと恐ろしいことになる、いやだけと言わなければならぬです。私は悲観的なのでもう遅いと思っっているんですけど、それでも言わなければならぬ。

言霊にとらわれる日本人

作家の井沢元彦が言霊について書いていて、日本人はいまだに言葉に魂があると信じているので

す。「明日運動会だけど雨が降るかもしれないよ」と言う、もし本当に雨が降ったら、「お前がそんなことを言ったからだ」と、そんな感覚がありますね。日本人は、言葉にした途端にそのことが起こってしまう、言霊という精神を信じているのです。

「戦争が起きるかもしれないね」と言っただけで、「お前のせいだ」と言われそうです。私は起きるかもしれないと言っただけで、「あの人」は起こしそうだ、と思っただけで、起こしたい顔をしていると思っただけ。

本当は戦争はしたくないのかもしれないし、平和を望んでいるとは言っているけど、いま米国の言うことを聞いておかないと大変だよ、日本の周辺はこのままじゃすまないよ、日本は弱くなってもいいの、というおかしな考えを醸成し、もやもや膨らませたものを出してくる。途中で論旨がすり変わった、前の戦争を反省しなかつたことは、歴史に学ばないということ。子ども達を戦争に送り出す状況を知らないうちに、だまされてつくることが行われ始めているという事なんです。それを近所のあまり考えていない人に言わなければならぬです。どう言ったらいいでしょう。そんな話は大体聞きたくないですね。いきなり、選挙や戦争の話をするのはよくない。なんの話からはじめると、天気の話からはじめることです。「今日は天気いいですね、ところで選挙はどこにいきますか」と言っただけじゃありません。考えてない

人と普段から会話のできる関係をつくっておくとなんです。間違っているでしょうか、私も言いながら不安なんです。

戦争がはじまつたらどうしますか？皆さん。逃げますか、戦いますか、国の言うとおりににはならないでしょう。でも法律ができたなら、向こう側に執行権あるのだから、いつのまにか戦争が始まり、戦地に狩り出されるかもしれないから、皆さん心配しているのですよね。

旭川の陸上自衛隊がイラクに向かったとき、北海道新聞にこんな記事が載っていました。「私は子どもの頃から雪祭りの雪像造りにあこがれて自衛隊に入ったのに、今年はずれなく残念だ。戦争というものはなんて恐ろしいものなんだろう」とそんな動機で自衛隊に入った人を美談のように書いてどうするんだと思っただけですが、なんだか分からないじゃないですか？。国民を守るために自衛隊に入り、東日本大震災のときは大変な活躍をしたんです。でも米軍がいち早く救援にやってきて、日本は沖縄の米軍基地のことは言いづらくなった。実は私は米軍が手伝いに来たとき、ぞつとしました。米国に言えなくなる理由がつけられた。言い過ぎでしょうか。

戦争に加担しなかつた二人の作家 喘息を再発させて忌避

きな臭くなったとき気休めのように寝る前に何

度も読んだり、憤りを感じたときに繰り返し読む本があり、金子光晴という詩人の書いた『絶望の精神史』です。大東亜戦争のときに戦争に加担しなかった作家はほとんどいないそうです。軍部に脅かされ、勇ましいことを書けとか、抜刀されて叩き切つてやると言われたとき、海音寺潮五郎が「切れるなら切つてみる」と言つたそうですが、いろいろ事情があつたようで軍の意向に沿つたものを書きました。このとき戦争に加担しなかった作家が二人いて、一人は金子光晴だと思つています。もう一人が山之口貌という詩人です。この二人は他の人は誰とも話さない。常に特高に監視されているので、山奥に行つて「戦争はいやだね早く終わればいいのに」と二人で語り合つていたそうですが、それを言うだけでも震え上がる気持ちだつたそうです。

金子光晴の長男に召集令状がきましたが、戦争に送り出されませんでした。長男は喘息で体が弱く戦争に行けるような状態ではなかつたのです。昭和十九年に徴兵検査を受けて健康体の甲種合格で兵隊にとられそうになつた。当初は博多から中国の戦地にはいり前線まで着いていき、そこで逃がそうと考へたようですが、中国に行つた途端自分たちも死ぬかもしれない。

こんな馬鹿馬鹿しい戦争で死ぬのはいやだから「まず、医師の診断書を手に入れるために、息子を応接室に押し込め、生（なま）の松葉をいぶし、喘息発作を再発させようとしたのだ。しかしそん

などきになると、なかなか思いどおりにゆかないもので、息子は咳入るばかりで、発作が起こつてくれず、苦しみのあまり、血を吐くしまつた」。そこで、彼の背に『歴史家の世界歴史』という分厚な洋書を十数冊入れたリュックサックをしょわせ、駆け足で、駅まで千メートルほどの道を往復させた。庭の芭蕉の下に、裸にして夜通し立たせた。びしょびしょと、冷たい秋雨が降つてきて、子どもはふるふる震えていたが、かえつて抵抗力ができていつて、風邪ひとつひかない。叱りつけて、その難業を続けさせる自分が、鬼軍曹のように思われてきた」

「しかしこの方法を続けて、わずかに発作を誘い出し、医師の診断書を手に入れることに成功した。そして八重洲口の召集出発には、母親が行つて、医師の診断書を示し、病気重体で同行できない理由を話して、難関をくぐりぬけた。また来年も似たような方法を強硬に繰り返して、ともかくこちらの目的を突つ張り通すことができた。最後には戸籍原簿さえ空襲で焼失したとみえて、もはや召集礼状もこなかつた」

これでしょう。全員がこうしなければダメなんです。一部屋に五、六人閉じ込めれば松葉だつてそんなにいらぬ。しかし、それはちがう。でも、その前に食い止める方法がありますか。もう手遅れなんじゃないかと思つているんです。

いつもどこかで、ちよぼちよぼした金持ちが金儲けをするために、今度はどこらあたりになりま

すかね。中東やアフリカの戦争に、米国がそろそろいい潮時だ、自分たちで何とかなりそうだと思つたあたりにやつてくる。

米国では、メディアにいかに必要な戦争であるかを流す広告代理店があります。この前のイラク戦争のときは、悪いのはこつちじゃない、米国は正義の名の下に、この国の平和のために戦つていると大宣伝をして、世界中を巻き込んでいつたんだそうなんです。結果、多くの民間人が死んでいき、罪のない人たちに罪を着せるようなことができる世の中なんです。恐ろしいですね。知らない間にそんなことを見せられている。テレビ、インターネットにサブリミナルみたいに、そんなことを突つ込むことが可能なんです。

自分の意思に忠実に

私が暮らしていくことが、皆さんが暮らしていくことが大切なことなんですか。「お前それは大切だろう。明日の朝、飯の一杯も食えなげきやどうするんだ。ひもじいころを知らないからな。日本はようやくここまでなつてきたんだ」と言う

人たちの背中をみながら生きてきたんですけど。その無我夢中の生き方。かつて経済大国のときの貿易黒字を米国に貢ぎ、ギリシャより借金が多いのに、どうつてことないような顔をしている。その余裕のあることが悪い正体だと思つているんですよ。言い過ぎだつたら謝ります。

私みたいなばんぐら、この世界でそこそこ食っていること自体が間違いだってことは重々分かってるんです。じゃうどうすればいいの。罪滅ぼしをし、そうじゃないと考えている人たちに、そうなんですから、と言わなければ…。

何が正しいか、正しくないかなんてものは、当時の水の流れによって、いまの空気によって、大きく変わるんです。大東亜戦争のとき戦艦大和が出て行った途端、撃沈されると分かっていたのもかわらず、出て行かなければならなかった理由をご存じですか。空気なんだそうです。いまここで大和が行かなかつたら、日本は負けるという空気があったそうです。いや、日本が負けるのは誰もが分かっていたんですが、ここで出さなければ負けを認めることになるから、出して沈めたんですよ。その空気を醸し出したのは当時の私たち、否「私」なんです。私はその空気を醸し出したことを大いに反省しなければなりません。

これから生きていく子ども達に、そういう未来がこないように、少しでも自分の思っていることを分かってもらおう、というとちよつと不遜な気がしますが、「自分の考えが思い止まっているけど、この先どうしたらいいの？」相談のできる関係を、いま会場にいる皆さんが少しずつ広げていくことです。事態はいっぺんにはよくならないと思いますが、それでも自分の意思に忠実に「いまの時代を生きたこと」を子どもに見せられる気がするんです。お金のためではないと。自分の意思

のためだと。

誰の言葉か分かりませんが、いつのまにか自分のなかの座右の銘のようになっていた言葉があります。それは自由についての定義です。自由とは、いかに自分の意思に忠実に動くかです。結婚して自由な時間がなくなつたとか、自由にお金を使えなくなつたと言いますが、じゃあ何のために時間を、お金を使おうとしていたのか。結婚をして充実した時間を送るため、その自由ではなかつたのか。我々は戦争のない世の中で自由を求めているはずなんですけど、その自由とは好き勝手にできることではない。希望がある未来を子ども達に見せてあげる自由ではないか、ということ。私たちが手を取り合つて、目を見つめ合つて、確認し合っているか、を。

「そうじゃねえよ、俺は今晩酒飲むために働いて、後はどうでもいいんだ」という人がいるとしたら、いくらここで戦争反対だと言つても、まったく右と左への泣き別れぐらい違う信条をもって、いまの時代の戦争反対ということに対峙してらるんですよ。

何を言いたいかというと、この場にいる人も、最後の最後の意思が決まっているのか。どうすんだということ、いやだけど言挙げし、そのことについて嫌だけど話し合つて、そして腹を決めておいて、松葉をいぶして戦争に行かないようするか、言われたら仕方が無いから子どもの代わり戦争に行くのか、敵討ちだからと行くのか、米

国軍を見殺しにできないから日本の軍隊が行つても仕方が無いと言うのか。

重要な小さなことの積み重ね

私がマイクを使わないで話しているのは、大声自慢ではなく、電気を使いたくないからです。この照明ももつと少なくていい、暗い方が話しやすい。実は、入り口で「電気消しましょう、クーラー止めましょう」と言える空気じゃなかつたんです。せめてマイクを使わないと思つたんです。でもこれは何にもなりません、何にもならないようなことから重ねていかないと、本当に何にもならなくなつてしまふと思つてらるんです。

根は同じだと思つてらるんです。今回の法案、そして原発のことも。未だに放射能を垂れ流しているのに、東京オリンピックだ新幹線だと浮かれた雰囲気は勝手につくり、オリンピックによって何も無かつたかのようにするのは、申し訳ないけどオリンピック選手は安倍さんの味方じゃないですか。そうじゃなかつたとしても、視線をそらす役割をしていますよね、それをスポーツ選手は考えているでしょうか。私は誰にも恨みはありませんよ、福原愛ちゃんは大好きですよ、でも浮かれている間に何が可決されるか分からなくなる。オバマ大統領の任期はあと二年です。米国大統領の任期は二期なので、後半に実績をつくりたいそうです。米国の大統領はみんなそうやってきた。間違

いであればそう言うてください。

私みたいなものでよければ使ってください。私
の話で何かが変わるといふのではあれば、変える
材料にしてください。私の話で役に立つと思えま
せんが、もし何かの役に立つのであれば呼んで下
さい。そのときにお前間違っている、ここは違
よ、こうした方がいいよ、話し合って言挙げをし
ながら、いい方向に向かっていき、少しでもいい
パスをして行かなきや、いまを生きている大人の、
そして戦争責任者にならないための方法だと思
うから。戦争責任のある芸能をやっている講師は
思うわけです。

米国ではロックコンサートなどの前に詩を朗読
するポエトリリーディングというのがあるそう
です。山之口貌全集のなかから詩を一つ朗読しま
す。

「ねずみ」

生死の生をほつぱり出して

ねずみが一匹浮彫みたいに

往來のまんなかにもりあがつていた

まもなくねずみはひらくなくなった

いろんな

車輪が

すべつて来ては

あいろんみたいにねずみをのした

ねずみはだんだんひらくなくなった

ひらくなくなるにしたがつて

ねずみは

ねずみ一匹の

ねずみでもなければ一匹でもなくなつて

その死の影すら消え果てた

ある日往來に出て見ると

ひらたい物が一枚

陽にたたかれて反つてゐた

山之口貌が戦争反対の思いを込めて書いたのは、
この「ねずみ」一つだけでした。命が簡単に扱わ
れてしまうのは、こんなに悲しいことなんだよ、
でも見慣れしなうと、誰も気にとめなくなるんだ
よつていうことを万感の思い込めて書いた。拳を
ふり上げて「こんな世の中」と言いたいけど、言
えなかつた。またそういう性質でもなかつたから、
こういう詩を書いた。作詩にはものすごく推敲し
たそうです。命懸けで書いたとは言いませんが、
こういう抵抗の仕方もあり、わたしはこつちをと
りたい。

リレートーク 叫ぼう！ 動こう！ 平和のために

若者と戦争

若者がほかにいらつしやらないので、若者代表
ということで最近の実感をお話します。

日本には民主主義が根付いていないとは、随分

私はこのねずみの詩を読んだときに、ねずみが
死んで干からびたことを何でこんなふう書いた
んだろうかと。こんな鈍感な世の中がなくなれば
いいと思いました。
いただいた時間がまいました。ご静聴ありが
とうございました。

司会 神田さんありがとうございます。テ
ンポよく、力強いお話をいただき勇気づけられ
ました。

引きつづきリレートークをはじめます。最初
は小川遼さんです。小川さんはブラックバイト
で苦しむ人の労働条件などの改善に取り組みた
め、二〇一四年一月に札幌学生ユニオンを立ち上
げ、その際のメンバーです。労働組合の組織率が
低下しているなかで、学生が団結をするという
て、私は明るい未来を感じました。今日は若者
と戦争をテーマとしてお話しをお願いします。

北海道大学学生

小川

遼

昔から言われてきました。日本の民主主義は勝ち
取られたものでないからいけないのだ。そのよう
な話は僕もよく耳にしていたのです。それに口を



合わせて、この国の政治を民主主義まがいの偽物だと小ばかにしてみたくもあります。

けれど、そんなことを言いながらも、僕はそういった主張を本当には信じていなかったのです。日本は民主主義を掲げていて、それなりに機能していて、最低限のラインは守られているのだと。

そんな平和ボケした信仰が、僕にもあった。

ところが七月一六日、衆院での強行採決です。多くの人々が国会を取り囲み、反対の声をあげました。札幌でもデモがありました。それにもかかわらず、強行採決。憲法学者の多くが違憲だと述べていましたが、それにもかかわらず強行採決。民主主義など無いのだと感じました。僕が信じてみれば、法など守る必然性がない。暴力装置が立法府へとその矛を向けることがない以上は、守らせるのは国民しかいないわけです。

しかし、この国の国民というのは、こんな状況を前にしても普通に生活している。暴動ひとつ起らない。礼儀正しく、行儀のよい国民です。法は守っても、守らせるような暴力性はない。

ところで「テロ」という語は、本来はフランス革命期口ベスピエールの恐怖政治のことを指して使われていたそうです。民主的な、自由な社会に対して、それを破壊すること。そのような政治を行うこと。これを「テロ」と呼ぶのならば、安倍晋三というのはまさしくテロリストではないでしょうか。

「テロには屈しない」なんて言葉が流行ったことがありました。テロと戦うためなら何をやってもいいという意味のようです。この言葉はむしろ、いまこの状況にある私たちにこそふさわしい。テロとの戦いです。礼儀も作法もいりません。ルールを犯したのは先方なわけですから。

新安法制制に対して平和を訴えることで応答することは、事態の矮小化に思えます。安全保障上の合理性を巡って議論することそのものが、テロリストの唾棄すべき要求に正当性を与えかねません。また安全保障を争点にすれば、話題は外交と軍事です。意見が細かく分かれ、世論も分断されてしまう。そうではなく、彼らがテロリストであるということに争点をつくる。そこで戦うということが必要なのではないかと思えます。

すこし話が変わります。徴兵制のことがとりざたされますが、徴兵制がそのまま敷かれることは

ないと思えます。

経済的徴兵制はあり得ると思えます。というより、実はすでに経済的徴兵制は行われている。僕の周辺でも、経済的な理由で防衛大に行った人はたくさんいます。就職先がないから自衛隊に行くかと考えている人もいます。これはもはや経済的徴兵制でしょう。

しかし、自衛隊に志願する人が減ってくると、国が一定の人数を確保するために策を講じる必要が出てくるかもしれない。その場合、二つの方法が考えられます。一つはエサを増やす。自衛隊に入るメリットを増やしていく。もう一つは貧乏人を増やしていくことで、どちらしかない。後者の方が安上がりですね。おぞましいことだと思います。

まとめがありませんが、以上で終えます。

司会 小川さんありがとうございました。つ

づいて、りんゆう観光社長で、グリーン九条の会世話人の植田英隆さんをお願いします。植田さんは、元・日本火災海上保険（現損保ジャパン日本興亜）会長で、経済同友会終身幹事だった故・品川正治さんの言葉「戦争を起こすのも人間、戦争を止めるのも人間」の垂れ幕を社屋に掲示されています。その考えなどもご披露いただければと思います。

観光産業は平和産業 戦争を起こすのも人間、戦争を止めるのも人間

りんゆう観光社長、グリーン九条の会世話人

植田英隆

務局一人、あと何人かの会員がいます。こつこつと活動を続けています。始めたことによつて、長いつきあいのある友人たちと誰一人として縁が切れませんでした。お前の意見はお前の意見、俺の意見は俺の意見、違つても相手を認めるといふことで、かえつて仲が深まりました。

とりとめの話になるかもしれませんが、ご容赦ください。一カ月ほど前に話してほしいと依頼がありました。日程だけで、これから準備と聞いていました。なかなかそのあとの連絡がなかったので、どうなったかと思つていましたら、一週間前にチラシが届きました。あわてましたが、他の予定をぶつけていなかったのは、幸いでした。

八年前に、グリーン九条の会を札幌で結成しました。いわゆる九条の会よびかけに賛同し、趣旨は「経済の視点で平和を考える」です。その世話人のひとりです。小さな会で、世話人三人、事



今わかつたことがふたつあります。ひとつは、行動するといろいろな人の声が聞こえ、また届くようになるということです。これまでに、私も、ああよくやつているねとか、私もどここの九条の会に入つていますとか、応援するよとか、年に何回か声をかけられてきました。行動するといろいろな人の声が聞こえ、また届くようになります。九条の会のことなど考えもしないだろうと勝手に考えていた人から熱烈なエールももらい、人を見る目がなかつた自分を思い知つたりしました。その人も社長でした。もうひとつは、自分ができる範囲でやればよいということでした。背伸びせず、身の丈にあつたことを心がける、それが活動を続けてさせてくれました。そのなかで、何ができる

か、やれるのかも見えてきます。

今国会で論議されている「安保法案」、きわめて問題ある内容と私たちも考えています。故・品川正治さんの言葉「戦争を起こすのも人間、戦争を止めるのも人間」のポスターを作りました。私たちの例会でお話いただき大事にしようと思つた言葉です。五枚一組千円で販売しています。関心あるかたはお買い求めいただければ幸いです。私はそのポスターを自宅の扉に貼りました。もう一枚「アベ政治を許さない」も貼りました。挨拶をかわす近所の人たちと別に突つ込んだ話をしてるわけではありません。ポスターで自分の気持ちを訴えて、何か感じてくれればいいと思つています。

会社社屋に「戦争を起こすのも人間、戦争を止めるのも人間 品川正治」のグリーン九条の会の垂れ幕もかかっています。機会があればぜひご覧になつてください。社員から了解をとるのは大変でした。社長が勝手にやれるものではありません。時間もかきました。ただ以前から、観光産業は平和産業、戦争では商売はなりたない、平和であることを望んでいることは当然とは、言つてきました。それを理解したベースの上で、掲示させてもらいました。

一般的に社長は体制寄りで自民党支持が多い、という捉え方をしている人が多いと思います。

大きな会社でも小さな会社でも、社長は発言が難しい立場なのだ、とご承知いただければと思います。会社は、お客様、取引先、社内、さまざまになつてのなかで存在活動しており、とくに社

長はそれらを度外視してものを言えるわけではありませぬ。私より考えがしつかりし、はつきりものを言う人でも、問題によっては立場上言えないということはあるわけです。

日本は会社と言ってもさまざま一〇〇万社以上あり、肩書は社長の人も一〇〇万人ではききませぬ。社長といっても、ひとくくりできるわけではなく、さまざまな考え、さまざまな思い、右から左までいろいろな人がいるとご理解ください。社長だから、といっぱひとからげにした見方をするのではないのです。自分は社長ではないと、だからその人と違っていると考えるのは、かえって自分たちの声を届かせることを狭くしているのではないのでしょうか。一致点はいろいろあるはずと考

えることで輪が広がります。

司会 ありがとうございます。苦労話を交えながら、どのように議論をしようかと思いついてご示唆いただいたと思います。

つづきまして、主催団体の一つである生活クラブ生協理事の鈴木律子さんをお願いします。鈴木さんは福島県出身で江別在住です。昨年からは理事を務められ、生活クラブの活動のなかで多くのお母さん達と憲法について語り合われている、とうかがっていますので、そのことも含め色々お話しを聞かせていただけたらと思います。お願いします。

リレートーク 叫ぼう！ 動こう！ 平和のために

子育て世代が考える憲法、アベ政権

生活クラブ北海道理事
鈴木律子

皆さん、子ども番組に出ている神田山陽さんをご覧になったことがあるでしょうか。番組では飛行機のきぐるみを着て、おしりからシャボン玉を飛ばして、走り回っているのを小学校三年生の息子と見ています。きょうはとつてもおもしろく、そして番組の姿と本音は違うと実感しました。

さて、アベ政権が衆院で強行採決した安全保障

関連法案の成立を許すことはできません。

日頃生活クラブ組合員として活動しているときに子育て世代へ向けて一緒に考え、話す内容を、一緒に来ている三年生の息子がなるべくわかるように努めながら意見を述べたいと思います。お聞き苦しい点や間違いがあるかもしれませんがご了承ください。



「人間は不完全で、弱い生きもの」です。

大人だってわがままを言ったり自分のことばかりだにすることがあり、そんなときおたがいに衝突してしまいます。それを調整するのが法、人間のわがままに歯止めをかけるのが法。そして一人ひとりの人間が間違ってしまうように国や政府も、ときとして間違いを犯しがちです。そうした国や政府、国家権力の間違いに歯止めをかけるのが「憲法」です。みんなのことをみんなで作るとき、よりたくさん意見を決める、これが多数決です。でも多数決で決めたことが必ずしも正しいわけではないこともあってほしい。七〇年以上前に日本がはじめた戦争もそう。国民の多数が応援しマスコミもみんな支持して「日本は正しい戦争をしているんだ」といつて政府のはじめた戦争を応援してしました。軍国主義の教育もあってほとんどの人が正しい判断ができなかつたのです。「戦争は反対だ」と発言する人を捕まえて牢屋に入れるような法律も、残念ながら多数決で作られました。

やっぱり多数決でも間違った結果になることがある。だから歴史を勉強するって、大切なことです。そして、人間は間違えるものだとしたらあらかじめきちんと考えて間違いを起こさないようにしようというのが「憲法」です。

いくら多数決でも決めてはいけないこと、やってはいけないことがあります。多数決でも決して奪つてはいけない価値があります。その時々多数意思に支持された政治であっても奪つてはいけない価値として「人権」を保障し、やってはいけないことは「戦争」です、と憲法で決めていきます。どんなにその目的が正しくとも戦争、つまり殺人という手段を使うことは間違っていると憲法はおしえてくれています。

お母さん達と話をすると、憲法も大事だけど、脅威が、という人も多い。

日本は戦後七〇年、戦争しない、できない国として歩んできました。先の戦争で大きな被害を受け三一〇万人といわれる被害者でした。各都市への空襲や沖縄戦、二度の原爆投下などにより甚大な被害を受けました。しかし同時に加害者としての歴史もあることを忘れてはいけないと思います。中国大陸、朝鮮半島を中心として二千万人といわれる多くの人たちの命を奪ったのです。歴史的にみていけば一八七四年に明治政府が行った台湾出兵からはじまって日清日露戦争、第一次世界大戦、満州事変と、一九四五年の敗戦まで実に七一年間に及んで日本はアジアに軍事侵攻し領

土を拡大しつづけたのです。

「中国や北朝鮮から攻められたらどうするんですか？」と怖がる人がいます。がその恐怖に比べて中国や朝鮮半島の方が日本に感じる不安や恐怖と、どちらが切実かは歴史的に見れば明らかです。「攻められたらどうする？」よりも、「攻められない国になる」ことが大切だと考えます。

中国や北朝鮮を脅威と感じる人に理由を問うと「核開発しているから」とか、「経済も発展しどんどん軍拡している」からと言う人が多い。もしそれだけで脅威と考えるのなら米国だって脅威のほうです。世界最大の軍事国家ですから。しかしそうならないのは米国との信頼関係が崩れていないからです。中国や北朝鮮に脅威を感じる理由は軍拡だけではなく信頼関係が築けていないからではないでしょうか。私たちの感じる「脅威」の本質がどこにあるのか冷静に見つめなければなりません。何を、どうして、怖いって思うのか。その理由をそもそもから考える必要があります。

戦後七〇年日本が戦争しない国であった間も、世界ではたくさん戦争や内戦が起きました。例えば米国は日本という戦後七〇年の間に約二〇カ国で軍事侵攻をしています。自衛隊を、憲法解釈をかえて米国と一緒に軍事行動がとれるようにすることは、周辺国に脅威を感じさせ、攻撃の口実を与えてしまい、かえって危険が高まるという心配があります。

「世界情勢を見ると、悠長なことは言ってもら

ない」「日本だって火の粉が降りかからないように集団的自衛権でできることをするために自衛隊が世界に出ていくべき」という声も聞きます。

でも世界のあらゆる戦争は自衛と、国防の名目で行われている事実を目を向けなければなりません。例えば米国軍を管轄するペンタゴンは「国防総省」。北朝鮮やイラクの軍隊も国防軍、ヒトラーの軍も国防軍で最後まで国防のための戦争だといいつづけていました。かつて日本が起こした戦争も自衛のための戦争という名目でした。わが国の自衛のためであっても難しい問題なのに、まして同盟関係にある仲間のための自衛権で自衛隊が様々なことができるようになったら、「憲法」は戦争への歯止めにもならなくなります。

「侵略戦争をしない」という条項はパリ不戦条約かフランス憲法にも入っており、どこの国の憲法にも普通に書かれているそうです。日本国憲法が日本国憲法たりうるのは「あらゆる名目の戦争をしない」（九条二項）としているからなのに、アベ政権が成立させようとしていることがいかに危険なことか、そして「憲法」を無視した行為がいかに危険であるか。考えると心臓がどきどきしてきます。

母としては思います。子どもが大人になつたとき、あなた達を決して戦争に行かせるような世の中にはしたくない。

私たち子育て世代は、一生懸命働き、または家事をし、一生懸命子育てしています。でも、それだけじゃダメなんです。熱心に育てた愛しい我が

子がいざ大人になったとき、正規雇用がないかもしれない、戦争に行かなければならないかもしれない、言いたいことが言えない世の中かもしれない。私の周囲の、あるママたちは「まさか」と笑います。確かに「明日から戦争しましょう」といつて賛成する人はいません。

戦争は人々がやむを得ないところに追い込まれたとき起こりうるものです。例えば経済格差が広がって、正規雇用のない若者は自衛隊に入るしかなく、そうしないと暮らしていけない社会状況が、これからどんどん増えていく。そうした若者は二〇〇六年末に改定され、新たに「愛国心」条項が入った教育基本法に支えられた教育を受けていて、さらに韓国や中国を脅威と考えている人かもしれません。秘密保護法、マイナンバー制度による国からの管理。「まさか」という思いでは平和はつぎません。「不断の努力」という憲法の言葉が改めて重くのしかかります。

不許壊憲

——リレートーク 叫ぼう！動こう！平和のために——

こんなにたくさん皆さんの皆さんが集まらなければならぬ、そういう状態にあることを悲しむとともに、希望を持って日本国憲法を私たちの手で守り、

絶対に子どもたちを戦争に行かせないために、そんな社会にしないために、子育て世代の私たちこそ、若者に負けず声を上げこぶしを上げます。署名も、抗議行動も、デモも参加します。そして大切なのは、共感の輪を広げる活動をつづけていくことです。強い決意と裏腹になんて微力なんだろうと落ち込むときもあります。でも、微力であってもつけつけて無力ではないと信じて、共感の輪を広げる活動をつづけていきます。

（伊藤真・弁護士、伊勢崎賢治・東京外国語大学教授、植野妙実子・中央大学教授、山下惣一・農民作家、それぞれの談話、著書等を参考に「憲法を考えるカフェ」を行ったときの内容をもとに話をしました）

司会 ありがとうございます。お母さんの視点からの力強いお話でした。

次に上田文雄さんをお願いします。前札幌市長で、今年五月から弁護士活動を再開し、私の父でもあります。よろしく願います。

前札幌市長、弁護士
上田文雄

そして守り抜く決意を皆さんと共有できることをうれしく思っています。

憲法第九条と前文をみれば、いまの安保法制は

まさしく憲法が禁じている極みです。憲法九条一項、二項、とくに二項は今まで何度も議論され、そしてその限界を探りながら、現実政治のなかでハードルを設けながら日本の独立を守ってきた歴史があります。

警察予備隊からはじまって、保安隊そして今の自衛隊となり、憲法であらゆる戦力を保持しないと謳ったことが、徐々に緩められてきたと思います。土俵が広がってきた観が否めない。ただ、現実に国民の生命、自由、財産が奪われていく状況では、国が何らかの対処をしなければならぬ。ここまでは個別的自衛権として何とか国民の理解を得られているところなのかもしれません。

あらゆる戦争は、自衛のための戦争です。今回の法案は日本と密接な関係にある国への攻撃を、日本の利益に合致する限度においてと制約をつけ、反撃する、武力行使できることを定めるもので、いわゆる集団的自衛権と言われるものです。

土俵の俵を外してしまう状況になってしまった。



立憲主義に明確に反し、解釈の限界を超えたものであることは多くの専門的な学者が指摘するところである。さらに、これまで日本国憲法と国際情勢と格闘しながら培ってきた日本国政府の見解、国会議論を取り外してしまうものです。これは日本国憲法の大精神である九条、平和主義を壊す「壊憲」です。安保法案は壊憲法です。衆議院は通過しましたが、皆の力で本当の国民主権の行使、こういうかたちで意思表示していくことを誓い合いたいと思います。

こんな騒ぎは二、三日だ、と高をくくっている発言を聞いたこともありすが、日を追うにつれ段々と国民の間にこの法案がいかに憲法を無視し、私たち国民主権を侵害する極めて悪質な法案であるとの認識が深まってきていると思います。その認識を共有する一人ひとりの活動が大切です。植田社長はポスターを作り素晴らしい活動しています。実は私もポスターを作っており持参しました。「不許壊憲」、憲法を壊すことを許さないと意思表示するため、ポスター持ち歩いています。横書きと縦書きの二枚あります。私が入壊憲と書いていたら、妻が絵を描いてくれ、家族でつくりました。ポスターを窓に貼って意思表示する。これは国民主権の主権行使で、賛同してくれる方が増えればと思います。

壊憲は、憲法を壊すだけでなく、私たちが大事にしてきた文化も壊していくことに通じます。日本人は真面目で、働き者で、律儀で、恥ずかしさ

を感じ取ることができると国民だと思っています。世界からも、ある意味尊敬されてきたと思います。

恥知らずなことはやらない、私自身そう思っています。憲法改正の手續きを恥ずかしいと思わなかったのだろうか。安倍首相は、憲法九条を改正するために、九六条の「改正手續き」を変えようとした。衆参両院とも総議員の三分に二以上の賛成がなければ憲法改正提案できない規定を、二分の一以上の賛成に改め、最終的には九条を改正する。これは裏口入学だとか、卑劣なやり方だ、恥ずかしい手を使うな、と多くの国民から批判され、引つ込めました。

安倍首相は憲法改正は難しいと判断して、解釈で憲法を変えようとしている。開いた口がふさがらない。こんな恥ずかしいことを認め、見過ごしてしまおうと、私たちの恥の文化を捨て去ることに なります。大事な私たちの文化を彼らは破壊しようとしていると申し上げたい。

インターネット上で素晴らしい、感動する演説が流れています。検索のキーワードは、大阪駅の「梅田」「街宣」「ともちゃん」です。多分学生だと思ふ、ともちゃんという女性が、七月一日に大阪駅の梅田で、法案が衆院を通過した抗議の演説をしました。私はこの演説をユーチューブでみて鳥肌が立ち、涙がでるほど感動しました。

これと同じように感動したのは、菅原文太さんの沖繩知事選での翁長現知事の応援演説です。菅原さんは次のように訴えました。「政治の役割は

二つあります。一つは国民を飢えさせないこと。安全な食べ物を食べさせること。もう一つは、これが一番大事です。絶対に戦争をしないこと」。この二つを彼は遺言として残していったと思います。そして大きな感動、彼の生き方、その言葉の意味を私たちの胸に落とし込んで、沖繩の声を知事選に反映させたのだと思います。

二十歳そこそこ思われるともちゃんは、日本国憲法の意味するところをいかになく述べつくし、わずかに数分の演説ですけど、安倍さんのやつていることがいかに無茶苦茶なことかを、扇動的ではなく淡々と述べている気品の高さに感動しました。是非皆さんもご覧になってください。

安倍さんは、どうしてこんなに急ぐのでしょうか。私たち弁護士は消費者問題を扱って分かっています。急がせるのは詐欺の常套手段だと。考える暇を与えない、いますぐにやらなければ損だよ、と言うのが詐欺です。振り込め詐欺も、いまやらなければ大変ことになるのと迫り、必ずごまかしがあります。

時間をかけてしっかりと議論すれば通るわけがないものを、急がせてやり遂げようとしているのは、独裁そのものと抗議の意思を表明するとともに、皆さん「不許壊憲」の声を上げましょう。

司会 ありがとうございます。私も、ともちゃんのスピーチをユーチューブで見ても感動し、涙がでました。

最後は、憲法学者の立場から小樽商科大学名誉教授の結城洋一郎先生にお願いします。六月四日の憲法審査会で三名の憲法学者が安保法案は違憲であるとの意見を述べ、とくに自民党から推薦された長谷部恭男・早大教授が集团的自衛権行使は違憲と発言したことから、多くの人が

「リレートーク 叫ぼう！ 動こう！ 平和のために」

権力を濫用する主権の篡奪者さんだつ

小樽商科大学名誉教授

結城 洋一郎

この法案を成立させてしまっているのか、という議論が沸き起こり法案への理解が深まったと思います。また、その後、多数の憲法学者が違憲だと発言し、多くの国民がこのままではいけないとの強い思いを抱くようになりました。では結城先生お願いします。

でになるとか、こういう話をお聞きすると、私自身も山形県出身なので、「東北にはキカナイ人間が多いな」と思ってしまうところなのです。まあ、出身地云々はどうでも良い話なので、こんな話はこの辺にいたしまして、次に、私に与えられたテーマについてお話しをさせていただきます。

さて、こんにちの日本は、戦後七〇年の長きにわたって維持されてきた平和国家としての、決定的な曲がり角に立たされていると思われれます。

想い起こせば一九四六年、現憲法が制定されるにあたり、時の吉田茂総理大臣は、「自衛戦争を肯定するが如きは、戦争を誘発する有害無益の議論である」として、現憲法第九条は、一切の戦力の保持と一切の戦争を許さない趣旨であることを明言しておりました。

その後、一九五四年、自衛隊が発足するにあたり、木村篤太郎・初代防衛庁長官は、「自衛隊は海外派遣という目的は持っていない」と述べ、さらには近年の一九九九年、高村正彦外務大臣は、「日本国民自らが憲法を作って集团的自衛権は行使しないと決めたのであるから、日本政府は当然それに縛られるのであり、集团的自衛権を行使することはわが国の憲法上許されない」と明確に答弁していたのであります。

このように、歴代の自民党政府は、憲法の趣旨を捻じ曲げつづけるにあたり、その場その場の言い訳を行ってきた訳なのですが、しかし安倍自公



「平和ボケ」は戦争法案

まず最初に、ただいま、皆さんのお話しをお伺いしながら感じたことを二点、お話ししたいと存じます。

第一の点は、自由にもが言えることの大切さでございます。言えるうちに必要なことを言うておかないと、最後には、命がけでないと自分の

意見を言うことさえもできなくなってしまうというところであります。

神田山陽さんのお話しに出てくる、反戦の気骨を貫いた方の例は、わずか二名でありまして、この方たちは超人的とも言える勇氣ある方々だと思います。私たち一般の凡人には到底真似しうることはと思われず、そうであればこそ、私たちは、自由にもが言えるうちに言うておかなければならないのだと思います。そうでないと、最後は命がけでなければ何も言えなくなってしまう。決して再びこのような世の中を作ってはならないということ、これが第一点であります。

第二は、これは全く私ごとになってしまいますが、神田山陽さんのお母さまが山形県からいらした方だとか、発言者の中に福島県出身の方がおい

政権はついに、これまで言い訳さえも反故にして、集団的自衛権の行使容認を閣議決定するとともに、「戦争法案」を強行採決するに至りました。

彼らは、単なる行政上の手続きで、条約や憲法の実質的変更を行い、それに合わせて法律を作るという、完全に転倒した手法によって権力を濫用しつづけて恥じるところがありません。

また、他国の軍隊を守るための武器使用を認めながら、「武力行使は行わない」とか、他国の戦争に対する後方支援のために、外国船の臨検・拿捕といった国際法上の「交戦権の行使」を命じながら、「他国の戦争に巻き込まれることは絶対がない」などと言って平然としています。このような人間の精神構造を、私たちは一体なんと表現すれば良いのでしょうか。

ある右翼団体は、大型街宣車の車体に、「真正のバカか安倍晋三」と大書して走り回っており、小林節教授は、「安倍内閣の行為は、バカがバカをやっているだけで驚くにはあたらな」と述べています。

しかし、そうは言うものの、これ程に論理的思考力に欠け、言葉をその本来の意味とは一八〇度違う意味で用いつづけ、現実に対する断定を繰り返しながら、そこに何らの自己矛盾を自覚することも、後ろめたさを感じることもなく世界を駆け回ることができる人間の姿を目の当たりにすると、やはり私は、哑然茫然として、大きな驚きを禁じ得ないのです。

このような人物がわが国の行政権の最高責任者なのです。

しかし、彼はそれだけでは飽き足らないらしく、「私がこの国の最高権力者だ」などと言い放っていますが、これは、「私は主権の篡奪者だ」と宣言しているのと、何ら変わりはありません。

我が国には古来より、この種の人間には「刃物を持たせるな」という戒めがあるわけなのですが、残念ながら、彼のお友達も皆同類のようで、自民・公明の代議士たちは、たった一人を除き、全員が「下駄の雪」になり下がってしまったようです。

もし、そうだとすれば、彼らの手から刃物を取り戻す仕事は、今や直接、私たち国民の手に委ねられている、ということになるでしょう。すなわち、私たちの行動によって、彼らには政権からご退場いただく以外にはない、ということなのです。

そしてこれは、わが国が再び、戦争という愚かな過ちを繰り返すことを阻止し、戦後七〇年間守りつづけてきた平和国家を維持するための、今私たちに残された唯一の道であり、私たちが将来の国民に対して背負うべき最大の責務である、ということでもあります。

「圧政に対する抵抗は、市民の神聖な権利にして義務である」

二百数十年前、民主主義確立期の憲法に書き込まれたこの規定は、今日の私たちが心に刻むべき国民主権原理の論理的帰結です。

さらにはここで、洋の東西を超えて繰り返され

てきた、趣旨を同じくする、いくつかの格言を思い起こしてみましよう。

ある国では、「天は自ら助くる者を助く」と言い、ある国では、「望むということは、出来る、ということである」と言っています。

またある国の人々は、「心誠にして之を求むれば、中らずと雖も遠からず」、「精神一到何事か成らざらん」と述べています。

私たちは、こうした先人の教えを思い起こしつつ、何としてでも戦争を阻止するために、想いを同じくする全ての人々と連帯し、決してあきらめることなく、平和と民主主義を破壊する者たちに立ち向かうべく、力を合わせて行こうではありませんか。どうも、ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。以上を持ちまして、本日のプログラムは全て終了しました。

神田さんのお話しにありましたように、近所の方に天気の話からもちかけつつ、今日の話の内容を広げていければと思います。

本日はお話しいただく神田さん、リレートークの皆さん、そして最後まで熱心に聞かれていた会場にお越しの皆さんありがとうございます。

本稿は、二〇一五年七月二三日に札幌市内で開催した「戦争法案」阻止市民フォーラムの内容をまとめたものです。 文責・編集部